

< 博士論文要旨 >

大槻平泉の研究

— 経世論と養賢堂学制改革 —

A Study of Ōtsuki Heisen:
His Political Theory and the Educational Reform of Yōkendō

国際基督教大学 大学院

アーツ・サイエンス研究科提出博士論文

A Dissertation Presented to
the Graduate School of Arts and Sciences
International Christian University
for the Degree of Doctor of Philosophy

2019年12月11日

阿 曾 步

ASO, Ayumi

大槻平泉の研究

—経世論と養賢堂学制改革—

阿曾 歩

【要旨】

本研究では、大槻平泉の経世論および仙台藩藩校養賢堂の学制改革に着目し、その思想的背景について考察した。平泉は全国的な知名度はほとんどない人物である。しかし、彼が養賢堂の学頭であった期間、藩校には全国的にも早い段階で蘭学が導入され、また彼の息子周斎が学頭を務めた時期には、国内で唯一藩校にロシア学が導入されるなど、平泉が注目に値する人物であることは間違いない。本研究では大槻平泉を主題に、これまで顧みられることのなかった彼の思想について考察した。

序章では、先行研究を整理し、問題の所在について述べた。

大槻平泉、名を清準という。安永2(1773)年、西磐井郡中里村(現岩手県一関市)の大肝入の家の次男として生まれた。江戸へ出て、林家の門に入り、昌平黌に学ぶ。約3年間の遊歴を経た後、仙台藩藩校養賢堂の学頭に就任、嘉永3(1850)年に死去するまで、約40年にわたってその任を務めた。

大槻玄沢やその息子磐溪、またその息子如電・文彦に比べて、平泉の名はほとんど知られていない。これまでの先行研究では、平泉は藩校養賢堂の発展に尽力した「郷土の偉人」といった描かれ方が主であった(例外として、森弘子・宮崎克則著『鯨取りの社会史』は平泉の博物学的な側面に着目した画期的な研究である)。確かに、平泉が養賢堂に大きく寄与したことは間違いない。ただし、学頭としての平泉は、その比重が大きいとはいえ、彼の一面である。彼の人生前半の豊かな経験と人間関係を抜きにしては平泉を語ることはできないであろう。本研究では、こうした問題意識のもと、平泉を藩校の学頭としてではなく、大槻家の一人として、また近世後期を生き抜いた一人の思想家として見ることにより、平泉の思想に迫ってゆきたいと考えた。

平泉を理解する上で、重要な概念として、「家学」がある。玄沢や磐溪について研究した大島英介は、大槻家を三つに分類した（大島英介『槻弓の春』）。一つは大肝入を務めた「宗家」、二つ目は平泉・周斎の「仙台大槻家」、三つ目は江戸に出た玄沢らの「江戸大槻家」である。これらの家々の間には強い宗族意識があった。互いをサポートし合う中で、彼らの間には「家学」ともいべき学問継承のあり方が見られた。こうした「家学」の実態は、「江戸大槻家」だけを見てはわからないものである。「仙台大槻家」や「宗家」も含めて総合的に見た時に、大槻家の「家学」は初めて姿を現わすであろう。本研究でその全体像を明らかにするまでには至らない。ただ、その端緒を明らかにしたいと思う。

また、平泉に着目するということは、仙台に着目するということでもある。仙台藩は先に述べたとおり、日本の蘭学・洋学史を考える上で、極めて特徴的であるが、その注目度は低い。蘭学・洋学といえば「西南雄藩」、そうした意識が根強いためと考えられる。本研究を通して、東北の蘭学・洋学史に光を当てる一助としたい。

第一章「大槻平泉の生涯」では、まず大槻家の由緒および大槻家の人々について整理した。平泉を理解する上で、大槻家の人々との関わりを見過ごすことはできないからである。

大槻家は代々大肝入を務める家であった。平泉の祖父も父も学問を好む人たちで、なかでも宗家を継いだ平泉の兄清臣（文作）は、藩に対して上書を提出するなど、聡明な人であったようである。平泉同様、清臣もほとんど注目されてこなかったが、清臣の上書の内容には、平泉の捕鯨の議論や、のちの周斎の物産学的な視点などに通ずるものが見られる。彼らの中の知識のネットワークの存在が浮かび上がってこよう。

また、仙台の大槻家から分家した「江戸大槻家」の人々は、玄沢をはじめ、磐溪、文彦、如電と学者の一族であった。こうした環境下で生まれ育った平泉もまた早くから学問を志し、仙台の志村東嶼のもとで学んだのち、江戸へ登り、林述斎の門に入った。時はまさに寛政の改革期にあたり、林家の私塾である聖堂は、

学制改革を経て幕府直轄の昌平坂学問所となった。この一連の改革を間近で見ていた経験が、後に養賢堂の学制改革にも繋がっていくこととなる。新体制となった昌平坂学問所には、寛政の三博士と呼ばれる指導陣が揃い、平泉は恵まれた時を過ごした。なかでも古賀精里との関係は注目に値する。彼が編纂したとされる『大学』関連の書物は、ほとんど平泉が執筆したものであるといわれているためである。

昌平坂学問所で学問に励むなか、さらに知見を広めるために、平泉は遊歴の旅に出ることを決意する。始めに 60 日間、次に約 3 年間の旅に出た。遊歴後は仙台藩に戻り、養賢堂の学頭に任じられる。平泉は 19 世紀前半という対外関係が目まぐるしく変化してゆく時代に、各種の学制改革を行いながら、約 40 年にわたって学頭を勤め上げたのであった。

第一章の終わりには、平泉の著作と史料のゆくえについて整理した。平泉をはじめ、大槻家の史料は早稲田大学図書館や宮城県図書館などに多く残る。また、2013 年には大槻家の御子孫から新たな史料が一関市博物館に寄贈された。今後さらなる整理・活用が望まれる。

第二章「大槻平泉の経世論」では、まず経世論とは何かという課題について整理し、次に平泉の著作『経世体要』に基づき、平泉の経世論を「内憂」と「外患」に二分して考察した。

『経世体要』は平泉の遊歴後に書かれた書物である。玄沢の息子玄幹とともに、約 3 年間、訪れた先は 58 州にのぼるといふ長い旅の間に見聞きしたことを、自身の学問のたすけとするために、また後々に活かすためにまとめたものであるという。この遊歴において注目すべきは、長崎に 1 年間滞在していることである。長崎では中野柳圃（志筑忠雄）と交流を持ち、オランダ語に触れ、蘭学の知識を得た。また唐館やオランダ商館も見学した。こうした立ち入りが難しい場所に入れたのは、玄沢のほか、堀田正敦（幕府若年寄、第 6 代仙台藩主伊達宗村の 8 男）と林述斎の後援があったからである。平泉と玄幹は、後援を頼りに、様々な場所へ行き、様々な人に出会った。こうして出来上がったのが『経世体要』である。

旅を経ての記録と言っても、『経世体要』は旅行記のようなものではない。遊学を通して考えたことがテーマ別にまとめられたものである。そのテーマは多岐にわたり、国の成り立ちから、天皇の問題、学問、政治体制、海防などが含まれる。

様々なテーマが描かれているが、その内容は国内の状況に関するものと外国をめぐる状況に対するもの、すなわち「内憂」と「外患」の二つに大きく分けられる。本章では、「内憂」と「外患」という二つの側面から、平泉が何に対してどのような憂いを抱いていたのか、そしてそれに対してどのような対策を講じるべきだと提案したのか、さらにそれらを総合的に見た時、平泉が世を^{おさ}経めるためにどのような理念を抱いていたのか、すなわち、平泉はどのような国を理想としていたのかについて考察した。

平泉が考えていた「内憂」は、学者らが自国を蔑む風潮であった。彼らは中国やオランダに陶醉して日本を卑下し、中には自国を「夷狄」と呼ぶ者さえいる。こうした状況が続けば、いつか大害が起こると考えた平泉は、学者は「皇国」の「国体」を講究すべきことを説いた。国の恒久的な繁栄は、「皇統」なしにはあり得ないと考えていたからである。そして、それを補佐するものとして、儒学を学ぶべきことを説いたのであった。

この平泉の議論は、近世を通じてあらゆる論争がなされた、華夷をめぐる自国認識の議論の一例であるといえる。「聖人の道」を受け入れるのであれば、「中華」である中国に対して、日本は必然的に「東夷」となる。これは日本の知識人たちの誰もが向き合わざるを得なかった問題であった。名だたる学者らによって様々な議論がなされるなか、平泉の議論の特色はどこにあるのか。

平泉は中国を「中国」「中華」と呼んで尊び、自国を夷狄と見る風潮を否定する。平泉によれば、「中国」と呼ぶのは、中国の「自称」であって、他国が呼ぶべき言葉ではない。さらに、平泉にとっては、どこが華でどこが夷という枠組みそのものが不要であった。世界の国々を見てみると、どんな小国でも自国を夷狄と見るなどせず、なかには自国を中心として世界地図を描く国まである。どうして自国を夷狄と名乗る必要があるだろうか。そこには、世界を知り、中国が相対化されることによって強まった、自国中心主義ともいえるべき考え方が見られる。平泉の

こうした見方は、長崎にて唐通事やオランダ通詞らと交流するなかで学んだものであった。

しかし、世間ではむやみやたらに中国やオランダをありがたがる傾向が強かった。その理由は「皇国」の「国体」を知らないからである。「皇国」の「国体」を知らなければ、共に天下を論ずることもできないと平泉はいう。なぜ「国体」を知らなければならなかったのか。

平泉は、「皇国」の「国体」を講究し、「国体」の根幹である「皇統」を守護することは、国家の長久を願うことと同義であると考えていた。各藩がそれぞれ自藩の維持に努めながら、時に幕府の指揮に従い、一丸となって、「皇統」を守護することにより、国は永久的に繁栄し、さらにその勢力によって「外患」にも対応することができるという。ここで注目すべきは、「列国共に其力を一にして」と、藩の範疇を超えて、一丸となることを説いた点と、「皇統」を守るように説いた点である。「皇統」を守護しようとするのは、国祚長久のみならず、その勢力でもって「外患」に襲われないためにも重要であった。それ故、平泉は「皇国」の「国体」を知り、その根幹である「皇統」を重視し、講究し、守護せねばならないと説いたのであった。

一方、平泉が憂慮した「外患」とは、長崎でロシア勢力を目撃したことに端を発するものであった。平泉が長崎を訪れたのは、レザノフが通商を求めて来航したのと同時期であった。レザノフが送還した漂流民の津太夫が仙台藩出身であったこともあってか、平泉はレザノフの動向に強い関心を持っていた。後に『経世体要』のなかで、レザノフ一行に対する幕府や長崎奉行の対応について、どのような誤りがあったのかを分析している。

そして、こうした誤りを発端として、いつかロシアが「謀事」によって日本を陥れる事態になることを恐れた。いつか「外患」がやってくるという危機感を抱いた平泉は、「外患」に対抗すべく、「制度」を立てることを構想した。平泉は海防の備えを説き、これまでのような一国一城の守りではなく、日本全体として海防体制を整えるべきことを主張した。さらに、海防体制を強固なものとするためには、オランダ語を学び、西洋式の要塞の作り方や西洋式の戦艦を作

るべきことを述べる。このように、平泉が蘭学を取り入れていく背景には、海外勢力に対する強い危機意識があった。

では、以上の分析から、平泉の経世論の理念とはどのようなものであったといえるのであろうか。実のところ、平泉は日本という国を高く評価していた。現状を泰平が極まっていると考えていたところからも（公然と政権批判がしにくい状況であったことを考慮しても）、それは明らかである。ただし、舞台装置としては、ではなかったか。平泉は養賢堂の学制改革時に、他の人々の建物の修繕をメインとした改革案に対して、舞台ばかり綺麗にして芝居の内容（「仕組」）が疎かになっているようなものであると批判した。この説明を用いるならば、平泉が考える日本の現状は、舞台が整っていたようなものであったのではないであろうか。日本には、世界に誇る「皇統」があり、その「国体」（たとえば、四季があり、五穀豊穡で、風俗が淳朴であること）も優れている。また、封建制もあり、兵もいる。

しかし、海外勢力という新たな役者の登場によって、改めて舞台装置を認識する必要が出てきた。自国を「夷狄」などと述べる輩を放っては置けず、もっと自国に対して自覚的にならなければならなかった。そこで必要とされたのが、芝居の内容、「仕組」である。そして、その「仕組」こそが、平泉が最も重視した、『大学』であったのではないだろうか。

平泉は、人々に対して、国家の長久を祈るためには、秘策などなく、「日用」の間の振る舞いを正しくすることにこそあると述べた。五倫五常を大切にし、一身を保つことを説く。これこそ、『大学』の教えである。

舞台と内容が整えば、後は演者の振る舞いで芝居は決まるであろう。平泉が『大学』を「宇宙第一の書」としていた背景には、こうした理念があったからではないであろうか。

第三章「平泉と養賢堂」では、まず仙台藩の藩校の沿革について整理し、次に仙台藩を代表する二人の知識人、芦東山と林子平の学校論についてまとめた。その上で、平泉が行った学制改革について、彼の「上書」や「意見書」をもとに、平泉がどういった意図で学制改革を行おうとしていたのかを考察した。

仙台藩の藩校創設は他藩と比べても早く、創設の議論が起こったのは 18 世紀前半のことであった。元文元（1736）年、「学問所」が設立され、藩主はたびたび学問振興に務めたが、不便な立地や人々の学問への関心の薄さ、さらには指導役間の対立による度重なる休講などの問題があったために、出席者は振るわなかった。

こうした藩校の状況を憂いて、様々な提言がなされた。芦東山（1696-1776）は、いくつもの上書を提出した。その内容は身分を問わない「平等主義」であった。当時定められていた「学式」では、座席は階級の順に長幼の序を守って座ることが定められていた。東山はこれに異議を唱え、元文 2（1737）年の上書で、学問所では身分に関わらず長幼の序のみを守って着席することを提案した。これは身分を軸とする社会秩序を揺るがしかねない案であり、藩の重臣たちに批判され、処罰されることとなった（この 24 年間にわたる幽閉の間に、大著『無刑録』が執筆された）。学問は身分の別なく必要であると考え、「平等」に学べる学校を構想した東山の考え方はあまりにも時期尚早なものであった。

林子平（1738-1793）もまた藩校に対して意見した。子平は、書物を充実させ、読書させることを説いた。現状のように、「四書小学近思録」などを一、二枚ずつ講釈するばかりでは、「何の役ニ」も立たない。学校はジャンルを問わずに多様な書物を揃えて、出席を促し、幅広い読書経験をさせれば、自然と才智ある人が出てくるといふ。子平はこうした内容の上書をたびたび提出したが、採用されることはなかった。

そして、9 代藩主伊達周宗の治世、平泉が学頭に任じられ、学制改革に着手することとなった。平泉が学制改革に乗り出した当時、反対する者も多かった。彼らを説き伏せるために、平泉は林述斎と堀田正敦に、改革への意見を求めた。彼らの権威を後ろ盾としたのである。「養賢堂学制改正意見書」（以下、「意見書」と略記）には、平泉が提言する 18 ヶ条と、その各条に対する述斎の返答が記されている。

これによれば平泉は、教育内容については、小学・近思録・四書五経など儒学の経典を「会読輪講」して学び、余力があれば歴史や文章、天文地理などを学ぶ

ことを説く。また、人材を吟味するために重臣が藩校に出向いて見回るべきこと、優秀な者には遊学をさせること、他藩から遊学してくる者を受け入れ、学問の交流を行うこと、養賢堂内で四書などの印刷をすること、武芸稽古のために稽古場を設置すること、諸芸道の司としての役割を担うこと、自分で稽古場を開く際には学校へ申し出ることが説かれる。学校設備については、医学巻の設置や教育が行き届くように、城下内三、四ヶ所に学校を設けるべきことを述べる。

「意見書」の内容がすべて達成されたわけではないが、書学、算法、礼法の三学科の設置（1811年）、兵学、槍術、剣術の三学科の設置（1812年）、医学館の設置（1815年）、蘭学方の設置（1821年）、医学館に蘭科を設置（1822年）と相次いで改革が行われた。他藩と比べても、医学館や蘭学方を設けた時期の早さは注目される。また、それらが別々に、藩校内の蘭学方と、医学館内の蘭科と二つに分けられたことも仙台藩の特徴である。

続いて、10ヶ条の上書「新養賢堂大概民治学制大改革建白」をもとに、平泉の学制改革の背景について検討する。

平泉は養賢堂を「御用」に立つ人材育成の場と考えた。そのために、「異学」ではなく、「正学」を学ぶべきことを主張した。また、武士の学問は、「家業人」の学問とは異なることを述べる。当時一般的であった講釈や輪講といった教育方法では、弁舌の巧みさが養われるだけである。そうした口先の技法でごまかすことなく、出仕後に「御用」に立つことを常に想定しながら、見せかけでない学力を身につけるべきことを平泉は説いたのであった。さらに、学校を学問成就の場としても捉え、指南役には学校で人材育成をする一方で、自らの学問を深める役割も求めた。

第四章「養賢堂における蘭書の利用」では、平泉が行った学制改革の結果として、仙台藩にどのような蘭学が興ったのかを明らかにするため、養賢堂で使用されていたと考えられるオランダ語史料に着目し、養賢堂における蘭学の実践例を考察した。

養賢堂には和書のみならず、多数の蘭書・洋書が取り揃えられた。平泉が「外

交ノケンネン」を抱き（『養賢堂雜纂』宮城県図書館所蔵）、蘭書・洋書を買求めたことも養賢堂の蔵書が充実した一因であったと考えられる。明治維新後に散逸の危機もあったが、伊達家の尽力により、現在、宮城県図書館には 251 点の洋書が残る。

本章では二つの史料を中心に考察した。その史料の一つは「養賢堂蘭学写本」（鶴見大学図書館所蔵）である。これらは版心に「養賢堂」と書かれた横罫線の間が閉じられた 8 冊の帳面である。オランダ語の文章が筆写され、その傍らに日本語訳が書かれ、また枠外には翻訳文が書かれているものもある。

これらの資料について、まず何を筆写したものであるかを明らかにした。オランダ語の文章を分析した結果、主に蘭学者の間に流通していた百科事典や学芸辞典（たとえば「クーランテントルコ」と呼ばれるヨハン・ヒュブネルの百科事典や「ボイス学芸辞典」と呼ばれるボイスの生活知識事典など）、自然科学に関する蘭書（たとえばハウトインの『自然誌』やマルティネットの『博物問答書』など）を筆者したものであることがわかった。

また、和訳部分を詳しく分析すると、当時の蘭日辞典『訳鍵』を用いて翻訳に挑んでいたことが明らかになった。さらに、翻訳の有り様を見ると、これらは大槻玄沢が後に「旧法」と自称することとなる、逐語訳的な手法が取られていた。すなわち、オランダ語文法を介した翻訳方法にはまだ至らなかったのである。

もう一つのオランダ語史料である「蘭文旧約聖書ダニエル書」（一関市博物館所蔵）は、名前の通り、旧約聖書のダニエル書の内容が書かれた一冊の帳面である。大槻文彦により、本書は平泉が旧蔵していたもので、史料に書き込まれた朱字も平泉の筆跡であろうことが記されている。

本章では、その翻刻を行い、さらに内容について考察した。その結果、旧約聖書自体の内容を写したのではなく、百科事典の DANIEL の項目を転写したものであった。

本史料の朱字は、さも本文の翻訳であるかのように見えるが、実は異なる。そもそも辞典の文章は第一章、第二章と各章に分けての説明はされておらず、本文の内容を読んで理解した上で朱字を書いたとは考えられない。何か別の書物を利

用して、本文の要約を記したものと考えられる。

また、たとえ辞典の一項目であれど、キリスト教に関する書物を翻訳していたことが発覚することは最も恐るべきことであったはずである。その為か、本史料の朱字には、キリスト教の神の奇跡に関する部分が徹底的に削除されている。本史料は、近世後期に百科事典という媒体を通して、キリスト教を知ろうと試みたことを示す事例として有用である。

本研究では、大槻平泉を中心に、彼の経世論および学制改革、その成果としての養賢堂における蘭書翻訳の実態について考察してきた。平泉は、遊歴中にレザノフの一件を目撃したことで、対外的危機感を強く抱き、それが「御用」に立つ人材育成の方針に繋がった。こうした方針が良くも悪くも功を奏し、平泉による学制改革後の藩校では、より実学的な側面が強化されたと言える。それゆえ、櫻田虎門に批判される訳であるが、しかし一方で、蘭学・ロシア学の発展、幕末には西洋軍艦開成丸の建造など、全国的にも優れた功績を残す結果となったのであった。

これまで、大槻平泉も、仙台藩の教育も、全国的に見れば、注目されることは多くなかった。それは彼らの歴史が地域史として分断されていたためである。しかし、地域史は地域史として囲い込むのではなく、他との繋がりの中で捉えることが重要である。

平泉は、長崎で中野柳圃から得た知識を、帰路、京都にて辻蘭室に教授し、また養賢堂の学制改革の際には、江戸の林述斎・堀田正敦らと話し合いながら案を作り上げるなど、仙台という地域の中だけで見るのではなく、全国的に、他者との繋がりを通して見ることで、平泉が果たした役割の重要性が明らかとなった。このように、ネットワークを通じた学問や思想のあり方を問うことにより、地域史を地域史として独立したものではなく、包括的に捉えることができる。本論文ではその一端を示したに過ぎないが、遊歴中の交流や書簡を検討することにより、今後より明らかになってゆくであろう。